

つぎの3点が重要な課題であると思われた。

(1) 過去に解決した問題の保守

前にも述べたように電力を取り巻く環境はこの6~7年の間に大きく変化しているの、当時とは問題の意義すら変わっている可能性がある。過去の問題やその回答が職場でどのように利用されているか、また保守の必要性がないかなど反省してみる必要がある。

(2) 手法の革命

高度成長時代の問題ではユニークな最適解を求めたりする手法という奴がかなり重宝がられたのであるが、最近のように条件は多種多様であり、変化も激しく、また人間のコンセンサスを得ることが非常に大切な時代になってみると、従来のORの手法というものがまったく頼りないものに見える。そこでたとえば多目的な問題を扱う方法とか逆LPといった新しい手法の出現が望まれる。また一方、在来の手法も現場で使うのにはむずかしすぎる。職場の問題に広く応用させるためには森村先生が紹介された中国流のORも結構であると思う。この型の問題はこういう計算をしな

さいでもよいのではないか。数学の演習問題を現場に持ち込むよりは、理屈抜きで御詠歌のようにやり方を覚えてもらったほうが実効があがるのかも知れない。

(3) ORの原点に帰れ

ORは第二次世界大戦中に組織化され多くの先覚者たちが発想の転換をなさしめたことは周知の通りである。しかし、それらの業績が手法となって日本に輸入され、その手法を頼りにORの仕事をするのをみていると頼りない感じがする。日本の戦国の武将がとった戦術には非常にOR的なものがあるが、彼らがORの手法を知っていたとは思われない。

われわれはもう一度ORの原点に帰って、問題を直視し手法にはとらわれず、実践的な解決策を探す態度を養うべきであると思う。

もとおり・みつお 1925年生
中部電力㈱ 情報処理システム部

ニューヨーク大停電に関する社会システム分析

1年余前の1977年7月13日、14日の2日間にわたり、有名なニューヨーク大停電が起りましたが、社会システムの見地からみた場合、どのような教訓が得られ、今後どうあるべきかを分析したものです。これは本年2月25日に日本のリソースマネジメント研究部会でひろうしましたが、現在各方面で大きな反響をよびつつあります。結論として考えられた重要な事項は数多くありますが、そのひとつをあげてみましょう。「社会、とくに都市社会の物理的メカニズムはほとんど電力によって支配されており、極論すれば電力そのものといっても過言ではなく、これが社会秩序（とくに隠された社会の病根）ときわめて密接な関係をもつに至ったことが実証され

た。電力と社会システムとのかかわり合いについては、1960年代と今日では質的な変換を示していることが明らかになったともいえる。したがって社会システムとしてみた場合の電力政策のあり方について、国家的見地からこれを考えて育ててやる着意が必要である。（米国においては、DCPA—Defense Civil Preparedness Agency—がdisasterの見地からスタディしている）。研究資料（約40枚）はなぐり書きものですが、ご希望の方にはコピーして送りますからお申越ください。

（日本のリソースマネジメント研究部会主査 小島光造 小野勝章事務所内）